様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：２５４０６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２０２７５

研究課題名（和文）１８－１９世紀イギリスの旅行記に見られる美意識とアイデンティティに関する研究

研究課題名（英文）The Sense of Beauty and Identity Perceived in British Travel Writings in the 18th and 19th Centuries

研究代表者
天野　みゆき（AMANO, MIYUKI）

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：５０２５８２８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：　18－19世紀イギリスにおける旅行記について、美意識とアイデンティティの問題を中心に研究を行い、次のような点を明らかにすることができた。１）これまで十分に注目されてこなかったドロシー・ワーズワスとヘレン・マライア・ウィリアムズの著作の意義、２）19世紀イギリスを代表する小説家、チャールズ・ディケンズの旅行記の特徴および小説との関連性、３）明治時代に日本、特に宮島を訪れた西洋人の旅行記の特徴とその影響。
　成果を公表し、教育・研究に活用するためのホームページを作成した。

研究成果の概要（英文）：　This study has attempted to examine the sense of beauty and identity and clarify the following points regarding British travel writings in the eighteenth and nineteenth centuries: 1) the significance of the writing of Dorothy Wordsworth and Helen Maria Williams, which had not previously been fully evaluated; 2) the characteristics of travel books of Charles Dickens the novelist, and their relation to his and other novels; 3) the characteristics and influence of travel writings by Westerners who visited Japan, particularly Miyajima.
　A website was made for publishing the results of this research for students or other scholars to utilize for their own research in this field.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学　・　英米・英語圏文学

キーワード：旅行記　美意識　アイデンティティ　ドロシー・ワーズワス　ヘレン・マライア・ウィリアムズ　チャールズ・ディケンズ　宮島

１．研究開始当初の背景

旅行は、階級、ジェンダー、人種、国家によって特徴づけられるものであるから、旅行記はこれらの問題を考える際の重要な資料である。

近年、人文科学の分野において旅行記研究の重要性が認識され、学際的な研究が活発に行われるようになった。また、旅行記のアンソロジーや復刻版も相次いで出版され、多岐にわたる旅行記の研究を行う環境が整ってきた。

２．研究の目的

次のような点を明らかにする。

(1) 18－19 世紀イギリスにおける旅行記（手紙や日記も含む）にはどのような美意識、アイデンティティ（個人としてのアイデンティティとナショナル・アイデンティティ）が見られるか。

(2) 異なる地域に関する旅行記（イギリス国内、アメリカ、ヨーロッパ、中東、日本）には、それぞれ顕著な特徴が見られるか、あるいは共通するパターンのようなものがあるのか。

(3) 旅行記と文学作品にはどのような関連性があるのか。

３．研究の方法

(1) 研究対象とする旅行記についてはいずれも、①作品に潜在する美意識とアイデンティティ（個人としてのアイデンティティとナショナル・アイデンティティ）を明らかにし、②著者のジェンダーと階級がどのような影響を与えているかについても考察する。

(2) 旅行記における語りとその虚構性、および文学作品との関連性を考察する。

(3) 旅行先がイギリス国内、アメリカ、ヨーロッパ、中東、日本のものを研究対象とする。

主たる研究対象はイギリス人の旅行記であるが、比較等において重要な場合はイギリス人以外による著作も取り上げる。

４．研究成果

(1) 18－19 世紀イギリスにおける旅行記の中で、これまで十分に注目されてこなかったドロシー・ワーズワスとヘレン・マライア・ウィリアムズの著作の意義を明らかにした。

特に、ウィリアムズは、英米でも近年ようやく再評価が進んだ作家であり、日本での研究は非常に少ないので、いっそう研究を深めていきたい。

拙論のタイトルと概要を次に記す。

① 「ドロシー・ワーズワスの旅――『グラスミア日記』が終わるまで」(2011 年)

ドロシー・ワーズワス(1771-1855) は生涯を通して旅を続けた人であった。早く両親を失い、ドロシーと兄ウィリアムはともに「我が家」を持つことを願い、10 年後にようやく実現させた。

ドロシーはウィリアムに「かつての自分」と言わしめるほどの感受性を持つと同時に、彼への愛情ゆえに彼だけを見つめ、強い一体感を抱き続けて生きた。彼が彼女自身であった、と言っても過言ではないだろう。ドロシーの日記とウィリアムの詩の共通性をみると、ドロシーが敢えて作家になろうとはしなかったことも理解できる。自然の中で共に生きることで兄にインスピレーションを与え、彼の詩作を支え、詩の清書をすることで彼女も詩人の人生を歩むことができたのだ。それは、彼女にとって自身が作家になることよりもはるかに意味のあることだったのである。

しかし、ウィリアムの結婚によって、ドロシーのアイデンティティは脅かされる。結婚式の朝のように兄がいくら変わらぬ愛情を示してくれても、ドロシーにとって、それは以前とは全く異なるものである。ウィリアムとメアリの間にドロシーの入り込めない絆が築かれてゆく。ウィリアムの魂に最も近い存在であることで支えられていたドロシーの魂は、未来の希望を描くことができず、過去を見つめ、過去を彷徨うことしかできなくなる。それに拍車をかけたのは、他ならぬウィリアムだったのではないだろうか。

ウィリアムはいつもドロシーを過去と結びついた存在として描いた。それでも、二人だけで我が家を夢見て歩み、二人だけで暮らしてい

るうちは、ドロシーは未来を考えることができた。しかし、兄夫婦との新しい生活の中で、かつては未来への希望を失わぬよう支えてくれた兄の詩は、彼女を過去の檻に閉じ込める役割を果たしたように思われる。晩年、ドロシーはしだいに正気を失い、姪のドーラへの手紙で最後まで葛藤に苛まれる苦しみを吐露している。苦難を乗り越えてようやく手に入れた至福はしだいに脅かされ、絶望へと変わっていったのだった。

② 「ヘレン・マライア・ウィリアムズの作家としての成長――『スイス紀行』との関連性において」（2014 年）

ウィリアムズ（1759-1827）は、現代の読者にはフランス革命を目撃した記録『フランスからの手紙』(8 巻、1790－96）の著者として最もよく知られる。この著作により、彼女は初期ロマン派の重要な作家とみなされる。彼女はフランス革命を熱烈に擁護した。『スイス紀行』(1798）は、最初に出版されたときには好評だったし、高く評価する現代の批評家もいるが、『フランスからの手紙』に比べると、まだ十分に評価されているとは言い難い。

『スイス紀行』は、1794 年にロベスピエールの外国人追放によりウィリアムズがスイスに逃れた際の日記を基にしたものだが、1798 年、フランスがスイスに侵攻する直前まで出版されなかった。彼女の代表作『フランスからの手紙』は 8 巻すべてが『スイス紀行』の出版前に刊行された。それ故、『スイス紀行』を評価するための予備研究として、本作執筆に至るまでのウィリアムズの宗教的・文化的背景、社会的地位、作家としての成長を考察した。

ウィリアムズは、ウェールズ人の父とスコットランド人の母のもと、中産階級・非国教徒の家庭に生まれた。彼女が幼いころに父親が亡くなり、一家はイングランド北部のベリック=アポン=トウィードに移り住んだ。ウィリアムズは、女性であるゆえに、また地理的・宗教的にも、社会の周縁に位置する存在として出発した。

しかし、彼女はロンドンの文学・政治サークルに加わり、最初は詩によって、次いで小説によって作家としての道を歩み始めた。長老派の牧師、アンドルー・キッピス(1725-95）とジョン・ムーア(1729-1802）の支援を受けたことが大きかった。前者は詩集の出版を援助しただけでなく、彼女を文壇の大御所、サミュエル・ジョンソンに紹介した。後者は、医師であり作家で、ウィリアムズが彼に会う前に、すでに数冊の小説と二冊の旅行記で人気を博していた。

ムーアは同じスコットランド出身ということもあり、長い友情を通してウィリアムズに大きな影響を与えた。特に『フランス、スイス、ドイツの社会と風俗についての考察』(1779）はグランド・ツアーのチューターとしての経験に基づいたもので、ウィリアムズにスイスへの憧憬を抱かせた点、作家の模範を示した点で非常に重要である。

自由で民主的な国としてスイスに憧れを抱いていたウィリアムズの期待は裏切られるが、『スイス紀行』には、彼女がムーアの旅行記の優れた点とみなしていた特徴がうかがわれる。人の心の慰めとなること、特に著者の異文化に対する寛容性と肯定的な態度、そしてユーモアである。

ウィリアムズは詩人、小説家として国際的な名声を得た後も、さらにより広い世界に生きることを求めてフランスへ行き、フランス革命の成り行きを見守り続けた。より積極的に政治家、特にジロンド派の人々（穏健な共和主義者の党員）と交流し、著作を発表することで、フランスとイギリスの懸け橋になろうとした。

『フランスからの手紙』における語りの技法として注目すべきは、①視覚的なイメージを生み出し、それが読者の想像力によって完成されるようにすること、②事実には基づくが、かなり感傷的に描かれた物語や詩を挿入して読者の共感を呼び起こすことである。

彼女は、「感受性」を他者の苦悩に共感する力と定義し、感受性の力こそが国家・言語・イデオロギーという障壁を崩せると信じていたのだ。

(2) 19 世紀イギリスを代表する小説家、チャールズ・ディケンズの旅行記の特徴および小説との関連性を明らかにした。

拙論「『アメリカ紀行』――ディケンズ版『ガリヴァー旅行記』」（2012

年）では、『アメリカ紀行』を西洋の旅文学の伝統に位置づけるとともに、「人間がどんなことにも（奴隷制にさえも）習慣によって慣れてしまうことの罠と恐ろしさ」を描き出すためにディケンズが『ガリヴァー旅行記』の手法と風刺を巧みに用いていることを論じた。

(3) 明治時代に日本、特に宮島を訪れた西洋人の旅行記の特徴とその影響。

拙論「外国人が見た明治・大正時代の宮島」（2014 年）では、アメリカの動物学者エドワード・S・モース(1838-1925)、オーストリアの皇位継承者フェルディナント（1863-1914)、アメリカのジャーナリストであったエリザ・シドモア（1856-1928)、イギリス人写真家ハーバート・G・ポンティング（1870-1935)、フランスの画家マテュラン・メウ（1882-1958)の旅行記について考察した。各々の関心に基づく観察眼と、日本人の資質や美意識への共感が彼らの旅行記を個性的なものにしている。

ポンティングは、明治 35－38 年及び明治 39 年の後半に日本に滞在したと思われる。瀬戸内海を郵便汽船で 6 回以上航行、帆船での探検も経験し、山陽鉄道で様々な場所を訪れた。これほどの瀬戸内海愛好家を最も魅了したのが宮島であり、「日本のアルカディア」だった。ギリシア・ローマ神話との連想、比較によって宮島の美しさを賛美しつつ、自然の様々な風景を観察した様子を伝えている。だが、彼の本領が発揮されているのはやはり写真である。

イギリス人の旅行記ではないが、シドモアとメウに関して貴重な資料を入手することができた。

シドモアは旅行作家、国際平和を目指す活動家としても活躍し、足かけ 3 年以上日本に滞在した親日家であった。アメリカの首都ワシントンのポトマック河畔への日本桜の植樹に貢献したことでよく知られる。平成 24 年に桜贈呈と植樹式の 100 周年を迎え、日米でシドモアが再び注目されている。彼女は「津波」という言葉が英語になるきっかけとなった記事を書いた人でもある。明治 29（1896）年 6 月 15 日に発生した明治三陸地震と大津波の被害についての記事が、同年 9 月号の『ナショナル ジオグラフィック』に掲載され、“tsunami” が広く知られるようになった。ほぼ同じ時期、宮島についての紀行文「不朽の島」が『センチュリー』誌（1896 年 8 月）の巻頭を飾った。雑誌に掲載されたものだからであろう、これまで宮島についての研究でもほとんど言及されていない。

宮島に魅かれるシドモアの強い想いと、人々との交流、そして豊臣秀吉への関心がこの紀行文の特色である。

この「不朽の島」と彼女の著書『シドモア日本紀行――明治の人力車紀行』との関連性については、拙論「『不朽の島』への憧憬――エリザ・シドモアと宮島」（2013 年）において詳細に論じた。

メウは、日本ではあまり知られていないが、フランスでは高く評価されている画家であり、世界的に有名なアニメーション作家、フレデリック・バックの師でもある。2013 年にはパリの国立海洋博物館でメウの多彩な創作活動をたどる大規模な展覧会が開催された。

メウは、アルベール・カーン財団から世界一周の奨学金を与えられ、夫人とともに日本に半年滞在する予定で大正 3 (1914) 年 4 月に来日、宮島での感動を彼はスケッチや絵、家族や友人への絵手紙に表現した。しかし、8 月初め、フランスの第一次世界大戦参戦により急遽帰国し、一兵士として戦地に向かった。

本論文にカラー図版を掲載した二枚の絵はいずれも現地で描かれたもので、1921（大正 10）年にメウの日本旅行を紹介したフランスの週刊新聞『リリュストラシオン』（4 月 21 日号）の記事に掲載された。現在の宮島とは異なる様をとらえていて興味深い。この新聞は 1843 年に創刊、フランスで初めて写真を掲載した新聞であり、ほとんどの写真がモノクロだった中で、全てカラーのメウの絵は人々の注目を集めたことだろう。

以上のような研究成果を得て、同じ場所についての旅行記を比較することで明らかにできる旅行観や自然観の歴史的変遷、イメージの形成等を研究する意義を見出すことができた。この成果を基盤としてさらに研究を発展させるために、平成 26 年 4 月より新たな研究「18－20 世紀の旅行記によるネットワークの形成とジャンル間の相互影響に関する研究」

（基盤研究（C）課題番号 26370286）を開始している。

(4) 旅行記に関して蓄積してきたデータおよび研究成果を教育・研究に活用できるよう、ホームページ「イギリス文学・文化研究のために」を作成し、その中の「旅行記紹介」で順次発表していくことにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

(1) 天野みゆき　「外国人が見た明治・大正時代の宮島」　『宮島学』（県立広島大学宮島学センター編、渓水社）（175－193 頁）2014 年、査読無

(2) Miyuki AMANO. "Helen Maria Williams's Background and Development as a Writer in Relation to *A Tour in Switzerland*."（「ヘレン・マライア・ウィリアムズの作家としての成長――『スイス紀行』との関連性において」）『県立広島大学人間文化学部紀要』第 9 号（61－72 頁）2014 年、査読無

(3) 天野みゆき　「『不朽の島』への憧憬――エリザ・シドモアと宮島」『宮島学センター年報』（県立広島大学）第 3・4 号（9－34 頁）2013 年、査読無

(4) Miyuki AMANO. "*American Notes*: Charles Dickens's Version of *Gulliver's Travels.*"（『アメリカ紀行』――ディケンズ版『ガリヴァー旅行記』）『県立広島大学人間文化学部紀要』第 7 号（103-112 頁）2012 年、査読無

(5) 天野みゆき　「明治時代の観光地、宮島――西洋と日本の視点から」『宮島学センター年報』（県立広島大学）第 2 号（7－31 頁）　2011 年、査読無

(6) 天野みゆき　「ドロシー・ワーズワスの旅――『グラスミア日記』が終わるまで」『県立広島大学人間文化学部紀要』第 6 号（129－142 頁）2011 年、査読無

〔その他〕

ホームページ　「イギリス文学・文化研究のために」

http://pu-hiroshima.sakura.ne.jp

(2014 年 7 月公開予定)

６．研究組織

(1)研究代表者

天野　みゆき（AMANO MIYUKI）

研究者番号：50258282